

ピースボート災害ボランティアセンター (PBV)

フィリピン台風 30 号 (国際名:ハイエン/フィリピン名:ヨランダ)

緊急支援 活動報告書

実施期間 2013年11月15日～2014年7月5日

主な活動場所 フィリピン中部セブ島、ビララン島

[オフィシャルサイト] <http://pbv.or.jp/>

[英語サイト/English site] <http://peaceboat.jp/relief/>

死者 6,000 人、避難者 400 万人を越す巨大台風 国際NGOとして現場へ

太平洋上で発生した巨大台風 30 号(国際名:ハイエン/フィリピン名:ヨランダ)は、11 月 8 日にフィリピン東部サマル島、レイテ島などに上陸。その後セブ島やパナイ島などの中部地域へも大きな被害をもたらし、ベトナムや中国まで到達しました。フィリピン全土で 6,000 名以上が犠牲になり、避難者数 400 万人を越す大災害となりました。

ピースボート災害ボランティアセンター(以下、PBV)では、11 月 15 日より現地にスタッフを派遣し災害救援に乗り出しました。国連や軍を含め多くの国際支援が駆けつけたものの、被害の大きさや複雑な地形などの悪条件が重なり、当初は様々な混乱や課題がありました。PBV では、自治体や現地 NGO、また海外から支援に集まった国際 NGO と協力しながら、支援の手が届きづらいセブ島での避難者支援やビラン島での被災者生活再建プロジェクトを実施しました。



被害状況

“TSUNAMI”と呼ばれるほどの高潮に見舞われたサマル島、レイテ島東部をはじめ、中部の複数の島々で風速 100m/秒という竜巻レベルの暴風による被害が発生しました。もともと簡素な造りだった家々は全壊し、避難所の建物も損壊がひどく雨風がしのげず、連日数百人が島を離れて避難を続ける状況でした。また、農漁村部では、インフラだけでなく、主要産業であったココナッツも壊滅的な被害を受け、漁船も流されるなど、いまま長期の復旧・復興に向けた努力が続いています。

フィリピンの被害概要

犠牲者数	6,300 人以上
住宅被害	約 110 万棟
避難者数	約 410 万人
被災者数	約 1,600 万人



プロジェクトの概要・実績

緊急支援（セブ島） ※p4 参照

首都マニラや中部の主要都市セブには、サマール島やレイテ島の被災地から多くの住民が避難していました。厳しい避難生活の中で体調を崩す住民もあり、医療用品や食事の支援を行いました。

活動期間	2013年11月15日～11月26日
派遣スタッフ	合田茂広、サイモン・ロジャース
活動内容	避難所への食事・医療用品の提供
パートナー	FJERA(Filipino Japanese Emergency Response Association)

支援金提供（レイテ島、サマール島）

高潮被害の直撃を受けた東部の島々では、電気、水などのライフラインも復旧できない状態が続き、被災住民にとっては外部支援による食料や物資が命綱でした。レイテ島、サマール島へ救援物資を届けるプロジェクトを行っていた2つの現地パートナーNGOに支援金を提供しました。

提供金額	6,500ドル
提供先①	FJERA(Filipino Japanese Emergency Response Association) レイテ島への生活用品、食料品の購入・運搬費
提供先②	PGX(People's Global Exchange) サマール島女性への衛生・生活用品の購入・運搬費

復旧支援（ビラン島） ※p5 参照

現地調査の結果、ビラン島での応急家屋修繕用品、キッチン用品の配布プロジェクトの実施を決定しました。支援に駆けつけた複数の海外NGOが資金・ノウハウ・人材などのリソースを持ち寄り、現地NGOが現場のプロジェクトを実行する協働体制で、国際支援から孤立していたビラン島の生活再建を支えました。

活動期間	2013年12月6日～2014年7月5日
派遣スタッフ	サイモン・ロジャース、山本隆、小鍋匠
活動内容	家屋の修繕用品、キッチン用品の提供
主なパートナー	PDRRN(The People's Disaster Risk Reduction Network Inc.) CWS Pakistan/Afghanistan

活動カレンダー

11月	8日	台風30号（ハイエン／ヨランダ）が、フィリピン東部、中部を直撃
	15日	2名の先遣・緊急支援スタッフを派遣、現地パートナーとともに被害調査
	25,26日	セブ島の避難所への食事・物資の提供
	26,30日	復旧支援のための派遣スタッフが合流
12月	30日-2日	タクロバンにて、国連OCHAのクラスター会議に参加
	12日	ビラン島での応急家屋修繕用品の配布プロジェクトが開始
	17日	ビラン島での生活再建プロジェクトに関する現地自治体との支援協定締結
2月	7日	ビラン島でのキッチン用品の配布プロジェクトが開始
6月	30日～5日	パートナー団体合同現地フォローアップとプロジェクト評価ミーティング、活動終了



緊急支援と現地パートナーNGO への支援金

発災から1週間後フィリピンに到着した先遣スタッフは、被害状況の調査とともに現地パートナーNGOとの協議を始めました。そこから数週間は、被災者が生き延びるための最低限のニーズ(食料、水、避難所、衛生用品など)の確保が優先でした。特に、大きな支援の玄関口となった都市部から離れれば離れるほど、それらの救援物資へのアクセスができていない状況でしたが、約7,000の島々から成るフィリピンの地形は、飛行機・ヘリコプターや船で物資を運ぶ手段に頼る必要がありました。漁民や住民が利用していた船の多くも流され、道路の損傷が激しかったことも、物資の運搬を難しくしました。

こうした中、PBVが持つリソースを素早く活かそうと、複数の現地パートナーと連携し、被災の大きい都市部への直接支援だけでなく、避難所への支援や支援金提供による間接支援も実施しました。

避難所への食事と医療・健康器具の提供 (セブ島)



大きな国際支援は、レイテ島やサマール島など地域に集中していました。もちろんライフラインが破壊された現場での被災者の命をつなぐ活動は優先されるべきですが、一方でマニラやセブ島に毎日何百人と避難してくる住民も大きな不安や混乱状態にあります。避難所となった体育館などでは、栄養のある食事が提供されていなかったり、健康管理を行うための器具などが不足していたりと、彼らへのきめ細かい支援も必要でした。

PBVでは、現地パートナーであるFJERAとともに、200名ほどが避難していたセブ島Babag バランガイ(ババグ村)の避難所に医療・健康用品(電子体温計・血圧計、車いす)を提供したほか、食事(弁当、フルーツ、ジュース)を提供しました。缶詰類などの食事が続く中、特に新鮮で栄養価の高いフルーツが喜ばれました。健康を守るのはもちろん、ぶつける先のないストレスを溜め込んでいた避難者への心のケアにもなりました。

企業からのご協力

海外では、使用する資機材や通信機器なども規格が違ったり、日本からの救援物資では現地の文化や生活に合わないケースも多く、スムーズな支援活動のためには現地で必要な物やサービスを調達する必要があります。渡航費や現地交通手配も含め、国内での救援活動に比べると費用もかさみます。街頭募金や振込など個人寄付に加え、(株)ラッシュ・ジャパン、テサ テープ(株)からは企業寄付もいただきました。また、(株)モンベルからは複数の装備品のご提供を、ソフトバンクモバイル(株)からは衛星携帯電話の無料貸し出しのご協力をいただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

LUSH FRESH
HANDMADE
COSMETICS

tesa



復旧支援と生活再建プロジェクト



発災後、多くの報道や国際支援はレイテ島タクロバンなどの都市部に集中していました。レイテ島、サマル島の間に位置するビリラン島は、当初それらの支援から孤立しており、11万2千人、2万世帯に及ぶ被災者への支援はほとんど届いていませんでした。

関係者とともにビリラン島の被害調査を行った後、PBV ではすぐさま、フィリピン NGO「PDRRN」と国際 NGO「CWS Pakistan/Afghanistan」をパートナーとして、生活再建プロジェクトの実施を決めました。被災した島南部のバランガイ(村)でニーズ調査を行い、高齢者や障害者、失業者を抱える家庭などを優先的に把握していきました。その後、村ごとに自治体や住民

チームを立ち上げ、全壊した家屋の建て直しに必要な資材、キッチン用品の配布を実施していきました。

プロジェクト対象 = ビリラン島南部 15 バランガイ(村)1,010 世帯

※ビリラン島その他、レイテ島・サマル島・セブ島での一連の生活再建プロジェクトは、複数の現地パートナー、国際 NGO の協働体制で実施しました。団体名は、p7 の「協力団体一覧」に記載しています。

● 応急家屋修繕キットの配布



PBV では、全壊世帯への応急家屋修繕キット(トタン、釘、針金など)の配布に関して購入・運搬費の一部を負担したほか、現地コミュニティとパートナー NGO「PDRRN」をサポートする形で、派遣スタッフと現地雇用スタッフが準備段階から配布後のフィードバックまでのプロジェクトに関わりました。配布時に、提供した資材を使って台風に強い家を建てる方法をレクチャーするなど、防災教育も意識したプロジェクトになりました。

● 新しい家での生活再建に向けたキッチン用品の配布



多くの世帯は住宅とともに、日常生活を送るために必要な家財道具も失いました。PBV では、応急家屋修繕キットの配布同様、新しく建て直した家で家族が料理や食事などの日々の暮らしを取り戻せるよう、キッチン用品(ポット、フライパン、お皿、スプーン・フォークなど)の配布に関して購入・運搬費の一部を負担したほか、派遣スタッフと現地雇用スタッフが準備段階から配布後のフィードバックまでのサポートを行いました。

連携と協働が、支援をより効果的なものに



PBV は、常に被災地における復旧・復興の主体となるのは地域の住民であるべきだと考えています。今回の災害では、国連が支援に駆けつけた関係者(国連機関、政府派遣団や軍、国際 NGO など)の調整を行うための、テーマ別「国連クラスター会議」を開催し、被害や支援の全体情報の共有とマッチング調整を行いました。

この会議に参加しながら国連機関や国際 NGO の動きや支援の偏りなどを把握した上で、被災自治体や地域住民組織とも積極的にコミュニケーションを取りました。これらの連携と協働が、限られたリソースを大災害の現場で効果的な支援につなげる鍵となりました。

ビリラン島住民からの声

「台風後、私たちのように、安定した収入もない苦しい日々を送っている貧しい家族にも支援をしてくれて嬉しかった。私自身、定職がなく、家族をどうやって養っていくのかの自信がない状態でした。そういった事情をきちんと考慮してくれたことが本当に助かりました」 — Gary Gaviola

「ほかのどの機関も、フィリピン政府でさえもできなかった支援を、私たちに届けてくれて良かった。でも、だからこそ、皆さんがここに来てくれたんだろうと思います。本当にありがとう」 — Rodney Rosales

「誰か助けて！ そう思っていた時に、皆さんここに来てくれたんです！」
- Felicidad Donato



今こそ、恩返しを！ —石巻市民が街頭募金に協力



高潮の直撃を受けたレイテ島タクロバンなどの被害は、日本の新聞・テレビでも大きく報道されました。その様子は、3年前に津波被害を受けた東北沿岸部を思い起こさせるものだったのかもしれませんが。東日本大震災以降、現在もPBVの復興支援拠点として活動する「ピースボートセンターいしのみき」のスタッフらが街頭募金を始めると、たくさんの石巻市民が協力してくれました。募金箱にお金を入れるだけでなく、一緒に街頭に立って呼びかけられたり、自分のお店や施設に募金箱を設置してくれたり、プロジェクト全体の約15%に当たる120万円の寄付が石巻から集まりました。

東日本大震災の後、東北被災地には海外からも多くの支援が寄せられました。PBVが行う石巻市での活動に参加してくれたインターナショナル・ボランティアは、実に56の国と地域に及びます。その経験を思い起こし、「今こそ、恩返しを！」と協力してくださった石巻の皆様から心から感謝します。そして、これからも災害救援を通じて、国境を越えた人と人のつながりを育んでいきたいと思ひます。

メディアでの紹介

2013.11.18 NHK 東北ニュース／2014.03.01 世田谷ボランティアネットワークニュースレター／04.11 読売新聞

ご協力いただいた企業・団体（略称表記）

ACT Alliance／ADRRN／AmeriCares／Beautiful Store／Canadian Catholic Organization for Development & Peace／CWS Pakistan-Afghanistan／DanChurchAid／Daughters of Charity／ICAN／Mennonite Central Committee／PDRRN
／木の屋石巻水産／信託資本財団／ソフトバンクモバイル／テサ テープ／ラッシュ・ジャパン／モンベル

その他、物資提供やご寄付など、個人の方々からもたくさんのご協力をいただきました。個人情報の観点から、お名前のご紹介は控えさせていただきますが、お一人おひとりの皆様に感謝申し上げます。

収支報告

(円)		
収入	個人寄付	4,565,465
	企業寄付	3,120,000
	サポート会員会費	717,679
	合計	8,403,144

(円)		
支出	現地 NGO への資金提供	672,900
	セブ島救援物資購入	101,913
	ビリラン島支援事業費	4,715,230
	人件費(現地雇用含む)	1,442,250
	旅費交通費・消耗品費など	1,470,851
	合計	8,403,144

活動を振り返って



ピースポート災害ボランティアセンター 理事
フィリピン台風災害救援プロジェクト責任者
合田茂広

「国際交流の船旅」を行う NGO ピースポートは、これまで何度もフィリピンに寄港した経験があり、そのパートナーたちを通じ、過去も台風災害への支援を行っていました。その後、2011 年の東日本大震災をきっかけに災害救援と防災・減災への取り組みを本業とする PBV を設立したが土台となり、今回のフィリピンでの活動は、これまでの海外での災害救援の中でも最大規模のプロジェクトになりました。

災害発生から 1 週間後、被害調査で訪れた現場で目にしたのは、ライフラインなどのハード面での被害だけでなく、漁業やココナツ農業といった産業再生の難しさであったり、教育現場での先の見えない不安といった中長期でのソフト面での課題でもありました。3 年以上に渡り、東北被災地の復興と向き合ってきた経験がなければ、そういった目に見えない課題にまで想像が及ばなかっただろうと思います。

フィリピンは、日本と同じ台風の通り道。毎年のように被害がありますが、基本的には自国で災害対応を行います。しかしながら、被災規模が大きかった今回は、国連や各国に援助要請を出し、たくさんの海外からの支援が駆けつけました。外部から集まる力と、フィリピン現地の力を合わせることで、それが、被災した一人ひとりの生活再建に最もつながるはずと、常に意識して動いていたように思います。

あれだけの災害です。もちろん、まだ復興はしていません。これからも現地パートナーと連絡を取りながら、微力ながらも後方支援を続けるつもりです。同時に、世界各地で起こる災害に対して、きちんと現場に足を運び、もっと支援の幅を広げていく努力をしていきたいと考えています。

最後に、フィリピンの現場でプロジェクトパートナーとして活動してくれた多くの団体に感謝するとともに、募金や情報提供、温かいご声援をいただいた日本の皆様にも、心から御礼申し上げます。



「サポート会員」になって、 PBV の運営を支えてください。

東日本大震災への被災者支援・復興支援をはじめ、国内外の自然災害における救援活動の初動資金、災害ボランティアの人材育成プログラムの実施には、PBV の運営に対する継続的な支援が必要です。皆様からの会費は、PBV の運営を財政的に支える基盤になります。

●サポート会員（1年間）

個人 一口 5,000 円

団体 一口 100,000 円

※二口以上のご協力も可能です。

●会員特典

- ・季刊誌「START」と年次報告書をお送りします。
- ・各種講演会・イベントを優先してご案内いたします。
- ・会員同士の集いの場にご参加いただけます。

●ご協力方法の詳細は

<http://pbv.or.jp/support-member.html>

「ピースポート災害ボランティアセンター（PBV）」

PBV は、東日本大震災への継続的かつ大規模な支援活動を展開するため、2011年4月に、国際NGO「ピースポート」が設立した一般社団法人です。ピースポートが1983年より行ってきた国際交流の船旅、そして1995年の阪神・淡路大震災以降の国内外の災害支援のノウハウとネットワークを活かし活動しています。現在は、宮城県石巻市での復旧・復興支援を中心に、ボランティア・リーダーの育成などにも積極的に取り組んでいます。

ホームページ <http://pbv.or.jp>

フィリピン台風30号 緊急支援 活動報告書

発行：一般社団法人ピースポート災害ボランティアセンター
編集：山本隆、合田茂広、ロビン・ルイス、サイモン・ロジャース
発行日：2014年9月5日
写真：ピースポート災害ボランティアセンター、PDRRN

この刊行物に関するお問い合わせは下記までお願いします。
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-13-1-2F-A
TEL:03-3363-7967 FAX:03-3362-6073
E-MAIL:kyuen@pbv.or.jp
URL:http://pbv.or.jp/